近世京都の名所案内記の順路設定にみる「洛中」「洛外」認識

NARRATIVE ORDER OF SIGHT-SEEING COURSES IN GUIDEBOOKS
BASED ON A CERTAIN SPATIAL COGNITION OF THE INNER
AND THE OUTER CITY OF KYOTO IN THE EDO PERIOD

菅井 聡子*

Satoko SUGAI

The purpose of this study is to clarify the characteristics of sight-seeing courses described in guidebooks of Kyoto in the first half of the Edo period, through the analysis of the Inner-city(Rakuchu). Compared with the Outer-city(Rakugai) courses being stereotyped in two styles, the Inner-city courses are described in various styles. By analyzing the reality of the sight-seeing courses, the starting points and the spatial cognition of the Inner and the Outer-city, we can understand that the sight-seeing in the guidebooks was constructed in both realistic and imaginary ways.

Keywords : *the Edo period, Kyoto, guidebook, noted place, sight-seeing course, Rakuchu and Rakugai (inner city & peripheral areas of Kyoto)*
近世, 京都, 名所案内記, 名所, 巡覧コース, 洛中洛外

はじめに

近世には、寺社参詣の隆盛と物見遊山的な名所巡覧の大衆化に呼応して、都市の名所を紹介する案内記が次々と板行された。京都は、江戸や大坂に先駆けていち早く名所案内記が誕生した都市である。近世京都の名所案内記、中でも名所図会を用いた研究はさまざまな分野から試みられているが¹⁾、名所巡覧の空間構成に注目した研究はいまだ少ない²⁾。巡覧コースの図示を試みた研究として山崎正史氏の研究や山近博義氏の研究があるが、対象とする文献が小型案内記に限定され、性格の異なる多数の案内記を比較検討するには至っていない。また前者は<洛外の巡覧>に注目しているが<洛中の巡覧>を検討しておらず、後者は模式的な図示にとどまり巡覧コースを詳細にたどったものではない。

本稿は、名所案内記に示された巡覧コースの組織立ての特徴を明らかにし、現実の巡覧可能性を検討する試みである。特に、巡覧コースが<洛中の巡覧>と<洛外の巡覧>に大別されていることを踏まえ、これまで取り上げられなかった<洛中の巡覧>の解明に主眼をおく。そして、その順路設定から読み取ることのできる「洛中」「洛外」の区分認識を考察する³⁾。名所案内記は、都市の実像を探る手がかりであるのみならず、編者自身も共有する当時の地域イメージを読み取りうる史料と考えられるが⁴⁾、これまでに名所記の記述の

中に洛中洛外の領域認識を考察した試みは管見では見当たらない⁵⁾。

本稿の目的は現実の巡覧の様態や都市構造を分析することにはなく、都市における名所巡覧の記述の史的展開⁶⁾を史料に忠実に検討し、巡覧の記述形式の特性と、順路設定にみる当時の空間認識を分析することを目的とする。

1. 名所記にみる巡覧コース

1-1 名所の記述順序から洛中洛外の領域区分を判読できる名所記

近世京都案内記の出版史は大きく二期に分けられる。第一期は明暦4年(1658)の『京童』より始まり18世紀半ばまでの諸本、第二期は安永9年(1780)の『都名所図会』登場以降の諸本である。本稿は、都市における名所巡覧の記述の原点を探るために有効と考えられる第一期に板行された諸本の検証を行なう。

第一期の案内記は、①『京雀』(1665)⁷⁾に始まる、通り別に町を案内する町鑑、②『京童』(1658)に始まる、社寺などの名所を案内する名所記、③『京羽二重』(1685)に始まる、①②を合体させた案内記の3種に大別できる⁸⁾。本稿の対象史料として、(a)巡覧コースを判読可能なことと、(b)巡覧コースから洛中洛外の領域区分を判読可能なこととの2条件を満たす②名所記に注目する⁹⁾¹⁰⁾。

名所記が取り上げる名所は主に社寺である¹¹⁾。名所と名所を結ぶ

* 京都大学大学院人間・環境学研究科
大学院生・修士(人間・環境学)

Graduate Student, Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto Univ., M.H.E.S.

表1 巡覧コースをたどることができて「洛中」「洛外」の区分を読み取りうる名所記

	書名 (改題本の書名)	編著者	初版発行年 (又は成立年)	初版 版元	書型	巻数	<洛中の 巡覧>	<洛外の 巡覧>	洛中の 順路型
1	『京童』	中川喜雲	明暦4年 (1658)	京都	大本	6巻 6冊	1~3巻	4~6巻	一円型
2	『洛陽名所集』 (山城名所記、移物記)	山本泰順	万治元年 (1658)	京都	大本	12巻 12冊	1巻	2~12巻	平行線型
3	『都案内者』	中川喜雲	寛文11年 (1671)	—	大本	5巻 5冊	1巻	2~5巻	一円型
4	『出来斎京土産』 (京みやげ、山城名所記)	浅井了意	延宝5年 (1677)	京都	大本	7巻 7冊	1~2巻	3~7巻	平行線型
5	『京師巡覧集』 (山城名所記行)	釋丈愚	延宝7年 (1679)	江戸	大本	15巻 15冊	2巻	3~15巻	平行線型
6	『莚藝泥赴』	北村季吟	貞享元年 (1684)	—	大本	8巻 9冊	1~2巻	3~8巻	往復型
7	『京内まゐり』	—	宝永5年 (1708)	京都	横本	1巻 1冊	禁中~二 条御城	比叡山延 暦寺以下	小円型
8	『山州名跡志』	沙門白鷺 (坂内直頼)	正徳元年 (1711)	京都	半紙本	22巻 25冊	17~22 巻	2~16巻	平行線型
9	『山城名勝志』	大島武好	正徳元年 (1711)	京都	大本	21巻 30冊	2~5巻	6~21巻	平行線型
10	『都名所車』	—	正徳4年 (1714)	京都	小本	1巻 1冊	上加茂~ 七の社	仁和寺以 下	往復型
11	『内裏難』 (山城名所社物語)	—	享保2年 (1717)	京都	半紙本	6巻 6冊	6巻	1~5巻	小円型
12	『京城勝覧』 (京都めぐり)	貝原益軒	享保3年 (1718)	—	小本	1巻 1冊	内裏~大 土堤	三条小橋 ~松が崎	平行線型
13	『山城名勝巡行志』	釋淨慧	宝暦4年 (1754)	—	—	6巻 6冊	1巻	2~6巻	往復型

(注記：史料3は1及び『京童勝遊』(1667)を再構成したものであり、2は4の、10は11の粉本である。)

巡覧コースは、名所の記述順序や、本文中に記された道筋を示す文言を手がかりにして得られる¹²⁾。各々の順路を図に描いてコースの有無を確認すると、巡覧コースを読み取りうる史料は16あった。

次に、図に描いた順路を整理すると、市街を中心に展開する<洛中の巡覧>と、郊外に展開する<洛外の巡覧>というまとまりを得られる史料は13あった¹³⁾(表1)。本文中の表現と対照させると、『莚藝泥赴』は「洛陽」と「洛外」という項目、『京城勝覧』は「洛中」と「洛外」という項目によって両者を分ける。『山州名跡志』と『山城名勝志』は「洛陽部」を設ける。『都名所車』は「洛外遠方の分」として郊外の名所を挙げる。その他「洛中」「洛外」という区分名を明示しない場合でも、コースの連続性から<洛中の巡覧>と<洛外の巡覧>が判別可能である。表1にそれぞれの区分状況を示す。

以上により、本稿は、巡覧コースの連続性から「洛中」「洛外」の領域区分を判読できる13史料(表1)を対象史料とする¹⁴⁾。巡覧コースは<洛中の巡覧>と<洛外の巡覧>の両者を併せて構成される場合が多く¹⁵⁾、ここで詳しく検討する<洛中の巡覧>が名所記述の重要な要素であることを確認できた。では次に、各々の巡覧コースをたどってみよう。

1-2 洛外の巡覧

従来の研究が触れていない点を指摘しておく。

<洛外の巡覧>の包含する範囲は、東山、山科、醍醐、伏見、宇治、八幡、山崎、大原野、嵯峨、愛宕山、高雄、岩屋、貴船、鞍馬、大原、比叡山で囲まれた領域¹⁶⁾である(図1)。巡覧コースの様態は、以下の2つに大別できる。

①放射型 洛外を17日間でめぐる『京城勝覧』¹⁷⁾の順路(図1)¹⁸⁾は、洛中から洛外へ向けて放射状に伸びる街道をたどる。この放射型の順路設定は『京童』『京内まゐり』『都名所車』にも共通し¹⁹⁾、『京城勝覧』と『山城名勝巡行志』では洛中に戻る復路も示される。

②円周型 洛中のまわりを一周するように洛外の名所をたどる、円周型の順路設定もある。『京師巡覧集』や『内裏難』は東山から右

図1 『京城勝覧』(1718)の洛外における巡覧コース

回りに、『出来斎京土産』や『莚藝泥赴』は左回りにたどる。

以上の2形式とも、ほとんどが東山の名所案内から記述を始めていることに特徴がある²⁰⁾。

1-3 洛中の巡覧

従来の研究では<洛外の巡覧>ばかりが注目されていたが、名所記の巡覧コースが<洛中の巡覧>と<洛外の巡覧>から構成されることからすれば、前者の分析を併せて初めて巡覧の記述形式の全貌が見えてくるはずである。<洛中の巡覧>を詳しく検討してみよう。

巡覧コースが判明する代表例として『京童』(1658)、『京内まゐり』(1708)、『都名所車』(1714)、『京城勝覧』(1718)を取り上げる²¹⁾。本文には表2に示す名所が登場する²²⁾。地図上で順にたどってみよう。

図2の『京童』²³⁾の順路²⁴⁾は、内裏から出発して寺町通を南下し、四条通を東に折れ、祇園から泉涌寺まで東山の名所をめぐる。五条橋から下京に入り、東寺から北へ、二条城、北野などを経て上賀茂まで行き、下鴨から再び寺町通へ戻り、荒神口にあった革堂で終わる。この順路は、御土居に沿って市街を囲む輪を描くようにめぐる。同じ中川喜雲の『都案内者』も御土居の内側に沿って一つの円を描く順路である。

図3の『京内まゐり』²⁵⁾の順路²⁶⁾は、3日間で洛中をめぐる。1日目は、内裏から出発して荒神口から鴨川を越え、銀閣寺から清水寺まで東山の名所をたどる。2日目は、誓願寺から出発して下京をめぐる、七条通を東へ進み、大仏殿周辺をめくったのち伏見街道を稲荷まで南下して再び大仏殿へ戻る。3日目は、三条寺町から寺町通を北上し、下鴨から上賀茂まで行き、大徳寺や北野を経て二条城までをめぐる。旅行者が「三条四条邊」に宿泊することが想定されており²⁷⁾、そこを起着点として、東部方面、南部方面、北部方面という地域別の小さな円を描いてめぐる。他の似た事例として『内裏

表2 <洛中の巡覧>に登場する名所

書名〔順路型〕	名所の配列順序
『京童』 (1658) 〔一円型〕	内裏→下御堂→誓願寺→和泉式部→腹帯地蔵→蛸薬師→四條河原→目病の地蔵→祇園→知恩院→圓山→まくづがはら→長楽寺→將軍塚→双林寺→かうだいじ→八坂の寺→盤山→産寧坂→子安→清水寺→地主権現→大谷→烏部山→六道→六波羅→豊國→大佛→耳塚→三十三間→泉涌寺→いまくまの→せいがんじ→五條の石ばし→六條河原のふん→はしづめの八幡宮→御影堂→夕顔の宿→因幡薬師→新玉津島→五條の天神→本願寺→東寺→羅生門→西寺→大通寺→水薬師→傾城町→雀の森→壬生→神泉苑→二條の城→北野の天神→西方寺→紙屋川→平野→千本えんま堂→船岡山→大とくじ→雲林院→今宮→上賀茂→下鴨→本満寺→真如堂→百万遍→革堂
『京師巡覧集』 (1679) 〔平行線型〕	園禪神→縣宮→相国寺→法成寺懷古→御堂→出雲路神→中河→真如堂→浄華院→本能寺→高倉八幡→三條橋→誓願寺→試心院→永福寺→清浄寺→六角堂→官者殿→佛光寺→平等寺→新玉津島→夕顔社→御影堂→五條橋→橋爪八幡→堀江→東本願寺→金光寺→西市→岩神→聖天→妙顯寺→堀河→反橋→滋野井→二條城→耳敏河→神泉苑→極楽院→雀森→壬生→五條天神→本園寺→西本願寺→水薬師→東寺→羅城門→西寺→守敏壇→尼寺
『京内まゐり』 (1708) 〔小円型〕	1日目：禁中→清荒神→百萬遍→吉田社→八種雷社→龍潭の池→木瓜大明神→新長谷寺→吉田殿→神楽岡→新黒谷→真如堂→舊真如堂→萬無寺→(銀閣寺)→光雲寺→若王子→永観堂→南禅寺→白川→(悲田院)→青蓮院御門跡→知恩院→心院→祇園牛頭天王本社→(敷の下、ぎをん町)→まくずが原→(丸山安養寺→長楽寺)→東本願寺墓所→(双林寺→高臺寺→七観音院→安井御門跡→珍皇寺→六波羅蜜寺→系んま堂)→庚申堂→八坂塔→(正法寺)→三年坂→経書堂→子安の塔→清水寺→烏部山→西本願寺墓所→左目牛八幡宮 2日目：誓願寺→六角堂→佛光寺→因幡堂→本國寺→壬生寺→島原→尼寺→東寺→西本願寺→興正寺→東本願寺→三十三間堂→智積院→養源院→妙法院御門跡→大仏殿→今熊野→泉涌寺→東福寺→稻荷大明神 3日目：(三條寺町の辻→下御堂→中御堂→浄花院)→下鴨→(大田の社、ふくとくの社)→上賀茂→大宮のやしろ→今宮→大徳寺→大將軍社→雲林院→船岡山→今宮御旅所→(七の社)→焰魔堂→大報恩寺→天満宮→(平野→紙屋川→金閣寺)→大島井→観音寺→経王堂→二條御城
『都名所車』 (1714) 〔往復型〕	上加茂→下鴨の社→乾菜寺→百萬遍→銀閣寺→鹿谷萬無寺→真如堂→新黒谷→聖護院御門跡→永観堂→南禅寺〔再版では、百萬遍→吉田社→聖護院御門跡→新黒谷→真如堂→鹿谷萬無寺→永観堂→銀閣寺→南禅寺〕→青蓮院御門跡→知恩院→祇園社→丸山(將軍塚)→長楽寺→東本願寺御塚→双林寺→安井→高臺寺→八坂の塔→建仁寺→あびすの社→六道→六波羅蜜寺→系んま堂→盤山→三年坂→経書堂→車宿→馬とめめ→子安の塔→清水寺→地主権現→烏部野→西の大谷→若宮八幡→大佛→耳塚→三十三間堂→養源院→今熊野→泉涌寺→東福寺→稻荷社→藤森社→御香宮→烏羽懸塚寺→城南神→竹田北不動明王→東寺→大通寺→壬生寺→本國寺→西本願寺→東本願寺→佛光寺→玉津島社→五條天神→空也寺→いなば薬師→六角堂→誓願寺→試心院→一條革堂→御堂八所→浄花院→相国寺→妙顯寺→千本焰魔堂→千本釈迦堂→北野天満宮→平野社→金閣寺→等持院→龍安寺→妙心寺→大將軍社→大徳寺→今宮社→七の社
『京城勝覧』 (1718) 〔平行線型〕	内裏→仙洞御所→女院御所→親王の御殿并諸官家 「東方」○京極通 鞍馬口→上御堂社→相国寺→東北院の跡→今出川通→中御堂→荒神口(清荒神社)→革堂→下御堂の社→誓願寺→和泉式部が墓→祇園の御旅所→五條橋通→御影堂 「中」清蔵口→妙覚寺、妙顯寺、妙蓮寺、本法寺→中立売→戻り橋→柳の水→本本能寺跡→六角堂→佛光寺→因幡薬師→五條天神→新玉津島→東本願寺 「西」安居院口→堀川→二條御城→神泉苑→大學寮の跡→雀の森→壬生→本國寺→西本願寺→不動堂→稻荷御旅所→朱雀権現堂→水薬師→西八條(清盛の舊宅の跡)→遍照心院→六宮権現→東寺→西寺の跡

難』も北部と南部の小円を描く順路である。

図4の『都名所車』²⁸⁾の順路²⁹⁾は、上賀茂から出発し、前半は東山の名所をたどって伏見の御香宮まで南下する。後半は下鳥羽から北へ向かう。東寺から下京をめぐり、寺町通を北上し、相国寺から西に転じて妙心寺に至り、最後は大徳寺近辺で終わる。南北軸に沿った巡り方を示し、南へ著しく拡大しているのが特徴である³⁰⁾。他の似た事例として『山城名跡巡行志』も、前半は堀川以東の名所を南向きに、後半は堀川以西の名所を北向きにたどる。『菟藝泥赴』は東西の通りを往復するようにたどる。

図5の『京城勝覧』³¹⁾には「洛中」と題する章がある。冒頭で内裏や仙洞御所を挙げ、その他の名所を「東方」「中」「西」に分けて記す。「東方」は、鞍馬口を起点として寺町通沿いの名所を記す。「中」は、清蔵口を起点として堀川以東の名所を記す。「西」は、安居院口を起点として堀川以西の名所を記す。いずれのコースも東西方向の移動が少なく、北から南へ名所をつなぐ特徴がある。この平行線的な順路形式は多くみられる。表1の史料2, 4, 5, 8(「洛陽寺院」)は、洛中の名所を東西に分けて各々を北から南へたどり、史料8(「神社部」), 9は東西方向の通りに沿った順路である。

以上のように本文の指示に従って順路をたどると、<洛外の巡覧>が放射型と円周型に大別できたのに対し、<洛中の巡覧>では一円型、小円型、往復型、平行線型の順路が地図上に浮上した。

2. 巡覧コースの現実性と仮想性

順路の巡覧可能性について検討してみよう。

表1に示すように、名所記の書型には大本と小本とがある。『京童』を始めとする大本複数冊の諸本は実際の巡覧に携行するとは考えにくく³²⁾、机上で仮想の巡覧を楽しむ読み物と位置づけられる³³⁾。では、携行に適する小本³⁴⁾は現実に即しているのだろうか。

3日間の日割りコースを示す『京内まゐり』(図3)は、一日分の距離が約20kmであり、当時の旅行者であれば日帰りでたどることので

きる距離である³⁵⁾。本文中に順路を示す細かい注意書きがある点³⁶⁾や、旅籠が多く立地する三条四条辺りを起着点とする巡り方³⁷⁾、携行に適する大きさ³⁸⁾からいっても、現実の巡覧を想定していると考えられる。それは筆者が実地に踏査した結果、確認できた。

他方、仮想の巡覧と考えられる事例もある。『都名所車』(図4)の行程は非常に長く、一日で巡覧可能な範囲を優に越える。順路を細かく記述する点³⁹⁾や携行に適する大きさ⁴⁰⁾からすると、一見、現実の巡覧を想定しているかのようなのであるが、順路を地図上に描出すると、距離の点では現実的とはいえないことが判明する。巡り方をみても、南へ突出した行程は不自然である。むしろ伏見までの主要な名所を悉皆的に記述するレトリックの傾向が強く、洛中洛外図や京都図の上で名所をたどる机上の順路設定であった可能性もある⁴¹⁾。

『京城勝覧』は、「これをたつさへて其所にゆき其名を尋ね見ばしらずして空しく過るのうらみなかるべし」(序)とあるように、実際の巡覧に携行することが前提となっている⁴²⁾。<洛外の巡覧>では(図1)、最長は石山方面の行程(16日目)で9里(36 km)ある。1時間に約4 km歩くとして9時間を要するが不可能ではない。しかし<洛中の巡覧>をみると(図5)、距離は短いが、南北移動を強調するあまり、現実の巡覧を想定した巡り方とはなっていない。

以上のように、机上で仮想巡覧を楽しむ大本に対して携行に適する小本があるが、現実の巡覧を想定しているはずの小本の順路であっても、必ずしもすべてが現実に即してはいないといえる。

3. 巡り方の特徴

<洛中の巡覧>の巡り方に共通する特徴について、主要ルートと巡覧の起点に限ってまとめておこう。

3-1 主要ルートと風景

図2～5に示した順路の構成には各々に個性が認められるが、細かくみると共通して登場するルートがある。すなわち、寺院が集中する寺町通をたどるルート、中央部の仏光寺・因幡薬師・新玉津島・

図2 『京童』(1658)の洛中における巡覧コース

五条天神を結ぶルート、南西部の西本願寺・東寺・島原・壬生を結ぶルート、北西部の北野・千本釈迦堂・千本焔魔堂・船岡山・大徳寺・今宮を結ぶルート、東山では、祇園から三年坂を経て清水寺に至るルートである⁴³⁾。

ではこれらのルートは、どのような風景の中を通過しているのだろうか。当時の都市域を手がかりにたどってみよう。

図2～5には、延宝・元禄期の都市域を示してある⁴⁴⁾。当時の都市域は未だ狭く、御土居の範囲には及ばない程度であった。したがって、主要ルートのうち、寺町通と仏光寺近辺は町中であるが、南西部の島原近辺と北部の大徳寺近辺は農地の中を通ることになる。他方、御土居の東方には市街が拡大しており⁴⁵⁾、祇園社から清水寺へ至るルートは東山を間近に見ながら町の中をめぐる部分となる。

主要ルートをすべて含む『京童』の順路をたどると(図2)、町中(寺町通⁴⁶⁾)→御土居東方の町中から農地へ(東山)→町中(因幡堂近辺)→農地(島原近辺)→町中(二条城近辺)→農地(大徳寺近辺)→町中(寺町通)という推移がみられる。

<洛中の巡覧>は町中の名所を中心に設定されるが、市街地ばかりを巡覧しておらず、町中の風景と田園風景が交互に立ち現れるような、風景の変化を伴っている。

3-2 巡覧の起点

巡覧の起点には以下の特徴がある。

①内裏 ほぼすべての名所記は、内裏(あるいは禁中)から起筆する点で共通する。その扱い方には二通りあり、順路とは関係なく内裏を別格扱いにする場合(『都名所車』『京城勝覧』など)と、内裏を巡覧の起点とする場合(『京童』『京内まゐり』など)とがある。

別格扱いにする場合、京都の公家文化を象徴する内裏を冒頭で読者に誇示し、京都の傑出性を演出する意図がうかがえる。ところが現実には、近世の内裏は全くの聖域ではなく、人々が日常的に自由に往還できる空間であった⁴⁷⁾。通常は立ち入ることのできない禁裏

図3 『京内まゐり』(1708)の洛中における巡覧コース

御所も、日を限って拝覧することができた⁴⁸⁾。内裏が巡覧の起点となる場合には、こうした観光名所としての性格が反映されていると考えられる。背景の違いによって扱い方に違いがあるが、内裏を記述上の出発点とする形式は、京都案内の文法として定着している。

②上賀茂神社・下鴨神社 内裏を別格扱いにする『都名所車』は、巡覧の起点として「上加茂」と「下鴨の社」を設定する⁴⁹⁾。本文中に「山城の一宮加茂の御社 (中略)諸国の旅人上京あらば 先上下の社へ参詣すべし」との表現があることから分かるように、この起点設定は、上賀茂神社と下鴨神社が山城国の一宮であり、数ある社寺の中でも特別な存在であることによる。

③「京の七口」『京城勝覧』のように「京の七口」を起点とする設定もある⁵⁰⁾。「七口」は京都と諸国を結ぶ街道の出入口である。七という数や名称、場所は時代とともに変動したが、中世から街道の起点としての意味合いが強く、その形式を受け継いだ設定といえる。

④鴨川沿い 以上の文化的歴史的背景を持つ記述上の起点とは別に、現実の起着点として三条大橋、四条河原、五条橋といった鴨川沿いを設定する場合がある。その事情をよく示すのは『京内まゐり』である。1日目の冒頭には「禁中」が掲げられているが、実際の巡覧の起点に想定されているのは「三條四條邊」である⁵¹⁾。また鴨川沿いを起点とする設定は、<洛外の巡覧>にも多くみられる⁵²⁾。

その背景には、三条大橋と五条橋が街道の起点に当たること⁵³⁾、三条大橋が洛中洛外の距離表示の基準点であったこと⁵⁴⁾、旅籠が集中していたこと⁵⁵⁾、鴨川沿いから東山にかけて遊興施設が集中し、この境界が繁華な場所であったこと⁵⁶⁾が挙げられる。加えて、旅行者の期待感を高める鴨川沿いの風景のよさも一因と考えられる⁵⁷⁾。

以上のように、巡覧の起点は、内裏、上賀茂神社と下鴨神社、「京の七口」、鴨川沿いに設定される事例が多く、文化的な背景をもつ形式上の起点の場合と、当時の都市の状況を反映した現実の起点の場合とがあると解釈できる。

図4 『都名所車』(1714)の洛中における巡覧コース

4. 名所巡覧にみる「洛中」と「洛外」

ここまでに見てきた順路設定の枠組みは、それぞれの名所記で想定されている「洛中」「洛外」の領域区分に基づいていると考えられる。したがって、巡覧コースを検証することにより、各々の編者の領域認識を読み取ることができるはずである。巡覧コースの連続性によって見えてくる「洛中」「洛外」の境界を整理し、区分認識の変移とその背景を検討してみよう。

本稿でとりあげた名所記が編纂された当時、天正19年(1591)に築造された「御土居」が、それまで曖昧であった洛中と洛外を明確に区分する物理的な境界として存在した。また『京羽二重』(1685)は、東は京極通(寺町通)から西は朱雀通(千本通)まで、北は鞍馬口通から南は九条通までを洛中とし、河原町通以東の洛外町統町と、西の七本松通、右近馬場通、島原を「洛外町」と区別していた。

ところが、本稿で検討した名所巡覧にみる「洛中」と「洛外」の境界はこれらの境界とは一致せず、御土居の東側でそのずれが顕著に認められた。御土居の東側に注目して記述上の領域区分(図6)を整理すると、表3ようになる。A地区(鴨川以東今出川以南三条以北)、B地区(鴨川以東三条以南)、C地区(鴨川以西御土居以東)が「洛中」「洛外」のいずれに含まれるかを示している。この表から、大きく分けて2つの傾向が認められる。

4-1 御土居以東を「洛中」に含む区分

図5 『京城勝覧』(1718)の洛中における巡覧コース

①鴨東を「洛中」に含む場合

鴨川以東のA地区やB地区を「洛中」に取り込む傾向がみられる。まず、B地区を「洛中」の連続として扱う事例がある。これは初期に登場し、『京童』(1658)で既に見られる。同年の『洛陽名所集』(1658)では、六波羅蜜寺と六道を「洛中」に含む。

その後、B地区に加えてA地区も「洛中」に取り込んでいく。『京内まわり』(1708)と『都名所車』(1714)である。

鴨東を「洛中」に取り込む背景には次のような要因が考えられる。

まず、御土居東面が17世紀後半に既に崩壊しつつあったこと⁵⁸⁾、B地区が近世京都の市街化の前線であり、御土居内の市街と変わらない風景のつながりがあったこと⁵⁹⁾が挙げられる。

A地区を加えるようになったことについては、洛中にあった知恩寺と真如堂が17世紀後半にA地区に移転したこと⁶⁰⁾、宝永大火後の二条川東の新地形成⁶¹⁾といったA地区の変化が考えられる。また名所の立地からみると、A地区とB地区が巡覧の起着点となる内裏や三条大橋と距離的に近いこと⁶²⁾、A地区とB地区には東山が近くに迫り、麓に位置する銀閣寺から清水寺までの名所に連続性があることが挙げられる。これらの立地上の特徴は、例えば『京内まわり』1日目の名所のつながりに反映されている。他に、A地区が近在の農村として市中と生活上のつながりがあったことも挙げられよう⁶³⁾。

ところで、『京羽二重』(1685)などに紹介された霊場順拝の順路には、市街から出発してA地区とB地区の名所を含んでめぐるのが多い⁶⁴⁾。霊場霊仏の順拝は中世後期に現われて江戸時代に入って盛んになったものであり、市街とA、B地区の名所を連続してめぐり順路形式の先例といえる。

②鴨川を境界とする場合

鴨川を境にして、A地区とB地区を「洛外」、C地区を「洛中」とする区分がある。例えば『京師巡覧集』(1679)、『菟藝泥辻』(1684)、『山州名跡志』(1711)、『山城名跡巡行志』(1754)である。

洛中洛外を限る境界の機能が失われつつあった御土居に代わって、寛文年間(1661-1672)以降には鴨川岸を洛中の東限とする記録があ

表3 名所記の巡覧コースにみる「洛中」「洛外」の区分(御土居東側の場合)

書名	板行年	「洛中」	「洛外」
『京童』*	1658	B地区	A地区
『洛陽名所集』	1658	B地区の一部	A地区・B地区のほぼ全域
『都案内者』	1671		A地区・B地区・C地区
『出来斎京土産』	1677		A地区・B地区・C地区
『京師巡覧集』*	1679	C地区	A地区・B地区
『菟藝泥赴』	1684	C地区	A地区・B地区
『京内まゐり』*	1708	A地区・B地区・C地区	
『山州名勝志』	1711	C地区	A地区・B地区
『山城名勝志』	1711		A地区・B地区・C地区
『都名所車』*	1714	A地区・B地区・C地区	
『内裏難』	1717		A地区・B地区・C地区
『京城勝覧』*	1718		A地区・B地区・C地区
『山城名勝巡行志』	1754	C地区	A地区・B地区

(A地区:鴨川以東今出川以南三条以北, B地区:鴨川以東三条以南,
C地区:鴨川以西御土居以東, *:表2に掲載したもの)

る⁶⁵⁾。寛文12年(1672)には、鴨川を境にして西を町代支配、東を雑色支配とする区分があり、河原町や木屋町が位置するC地区は洛中の扱いを受けた⁶⁶⁾。鴨川を境界とする名所記は延宝7年(1679)以降に登場しており、当時の領域区分の変化に対応したものといえる。

A地区、B地区、C地区は御土居の外であるが、御土居東面の崩壊や市街化の進展といった変化に即して「洛中」に取り込まれて捉えられている有様が分かる。

4-2 御土居を意識した「洛中」「洛外」の区分

<洛中の巡覧>をあくまで御土居内にとどめ、御土居を境界として「洛中」と「洛外」を区分する事例も依然としてある。『都案内者』(1671)、『出来斎京土産』(1677)、『山城名勝志』(1711)、『内裏難』(1717)、『京城勝覧』(1718)である。例えば『京城勝覧』は「京都の周大土堤」として御土居を説明し、河原町について「是土堤の外にあり 洛外なり」とするなど、御土居が意識されている。

境界としての御土居は現実には有名無実化していたことから判断して、この捉え方は現実に則したものとはいえず、旧来の形式的な「洛中」「洛外」の区分が用いられたものといえよう。

4-3 先行書の「洛中」「洛外」区分を改編した事例

中川喜雲の『都案内者』(1671)は、『京童』(1658)とその補遺である『京童跡追』(1667)から抜粋し、配列順序を再構成したものである⁶⁷⁾。順路を比較すると、先行書の『京童』はB地区を「洛中」に含むが、改編後の『都案内者』は「洛中」を御土居内にとどめている。

他に『出来斎京土産』(1677)の先行書は『洛陽名所集』(1658)である。『洛陽名所集』はB地区の一部を「洛中」に含むが、改編後の『出来斎京土産』は御土居を意識した区分に従っている。また『内裏難』(1717)の先行書は『都名所車』(1714)である。『都名所車』はA地区とB地区を「洛中」に含むが、『内裏難』の「洛中」は御土居内にとどまるように改編されている。

A地区やB地区を「洛中」に含む名所記が粉本となる事例では、改編後に「洛中」が御土居内にとどまるように再構成されていることが分かる。『京童』と『洛陽名所集』は初期の名所記であり、洛中洛外の領域認識を自由に表現しえた面があると考えられるが、名所の

図6 御土居以東を「洛中」に含む区分

配列順序の変更によって整正した形式に改編される過程において、記述上の形式的な基準として御土居が再登場している有様をみることができる。

おわりに

本稿は、近世京都の名所記に紹介された巡覧コースの様態とその記述特性を、<洛中の巡覧>に注目して検討し、順路の巡覧可能性の検証を行なった。巡覧の記述には名所記構成上のレトリックが伴い、すべてが現実に即しているのではない。本稿でみた順路特性は、それぞれの名所記における現実と仮定の相違によって生じると言えるだろう。したがって、本稿でみてきた巡覧の記述特性は次のようにまとめられるのではないだろうか。

まず時間軸に沿って分析すると次のような記述の推移がみられる。第一期初期にあたる17世紀末までの名所記は大本複数冊である。したがって、机上で仮定の巡覧を楽しむ読物とみなしうが、『京童』(1658)でみたように、順路設定には現実が反映されている点が多い。18世紀に入ると、実際の巡覧に携行可能な小型名所記が登場する。『京内まゐり』(1708)はあらゆる面から見て最も現実に即した記述である。第一期後期には大本の名所記に仮想的な順路設定が増える。そして現実の巡覧を意識的に描いているはずの小本にも、仮想的側面が現われる。すなわち、『都名所車』(1714)は南に長い特異な巡り方を示し、『京城勝覧』(1718)は起点、巡り方、領域区分からみて、最も形式的な順路設定である。

以上のように巡覧記述の変遷をたどると、仮定巡覧の大本であっても現実を多く反映する初期の記述に始まり、『京内まゐり』で最も現実に即したものとなるが、次第に形式化する傾向を指摘できる。

巡覧コースにみる洛中洛外の領域区分の認識について変遷をたどると、まず当時の市街状況を反映してB地区を「洛中」に含む認識が初期に現われ、後に、鴨川を境界とする認識やA、B地区を「洛中」に含む認識が登場する。他方、御土居を形式的に利用する区分は主に18世紀の名所記にみられることから、洛中洛外の記述上の境界が形式化する傾向をみてとれる。境界の形式化は、粉本を再構成

した事例(『都案内者』『出来斎京土産』『内裏難』)によく確認できる。

さらに編者の執筆事情を検討に加えると、御土居を境界とする事例のうち、『出来斎京土産』『京城勝覧』の編者は他国出身であり、執筆当時は京都にいなかった事情がある。『都案内者』も広島で執筆されたものである。書物の引用を中心とする『山城名勝志』は、紙上巡覧的に執筆されたことや、『京城勝覧』の編者と交遊があったことが関係しているであろう。洛中洛外の区分認識に形式化の推移が認められるとともに、編者の出身地、執筆当時の所在、執筆方法にみられる現場感覚の希薄さが、形式的な区分認識に関係しているといえる。本稿の範囲で可能な説明はここまでであるが、今後、史実と照らし合わせて検討する必要がある。

名所記はしばしば京都から離れた土地でひも解かれるものである。書上で仮想巡覧的な名所めぐりをする読者の前には、編者が記述してみせた京都がイメージとして浮かび上がることになるであろう。巡覧の記述は近世都市京都のひとつの描き方であり、名所記は都市の認識論において無視できない史料である。その記述形式を検討することは、編者側と読者側の相互の都市イメージを解明するため不可欠の準備作業と考える。

注

- 1) 名所図会の挿画を用いた研究は多く、眺望景観の構造を解析した小原行央ほか「名所図会にみる近世における京都・東山の眺望景観の構造について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』1991, 117-118頁)、挿画の視線方向を探った須部信義「建築・場所論に関する基礎的研究(Ⅳ)近世(江戸期)の京都の場所論的考察」(『日本建築学会近畿支部研究報告集』1994, 1145-1148頁)、植生景観の変遷を考察した小椋純一「絵図から読み解く人と景観の歴史」(雄山閣, 1992)、挿画に描かれた内容を読み解いた西野由紀「名所図会」本の挿絵(宗政五十緒編『日本近世文学研究の新領域』思文閣出版, 1998, 135-162頁)等があるが、名所の配列順序に注目したものはない。仮名草子研究からは松田修「中川喜雲・ある名所記作家の場合」(『日本近世文学の成立-異端の系譜-』法政大学出版局, 1963, 183-219頁)等の作家論がある。
- 2) 巡覧コースを明示した研究には、『京城勝覧』(1718)の洛外コースを再現した山崎正史「歴史都市の意匠とその保全計画手法に関する基礎的考察-地域の文脈解説にもとづく景観計画試論」(京都大学学位論文, 1993, 35-53頁)と、小型案内記のコースの傾向を探った山近博義「京都もの」小型案内記にみられる実用性(足利健亮先生追悼論文集編集委員会編『地図と歴史空間』大明堂, 2000, 361-371頁)がある。本稿の対象には入らないが、霊場霊仏順拝の順路を明示した試みとして、守屋毅・赤井達郎「町人の生活文化」(京都市『京都の歴史5』学芸書林, 1972, 298頁)がある。江戸については、鈴木章生「江戸の名所と都市文化」(吉川弘文館, 2001)等で名所の配列順序と都市認識の研究がされているが、京都については、板行された名所記の多さにも関わらずまとまった研究は少ない。
- 3) 管見に触れた案内記全般についていえば、順路を示さずに内外区分をしている事例は見当たらなかったため、本稿は順路の連続性に現われている洛中洛外の区分認識に注目して検討する。
- 4) 水本邦彦『絵図と景観の近世』校倉書房, 2002, 201-202頁。
- 5) 平安京については佐々木日嘉里『『栄花物語』『大鏡』に現れる平安時代の都市空間認識』(『日本建築学会近畿支部研究報告集』1997, 185-388頁)がある。近世の京都図を用いた研究に園田英弘「京都図の思想-洛中と洛外の間-」(『日本研究』7, 1992, 71-87頁)があるが、名所案内記からの究明はみられない。
- 6) 近年、歩行者空間の再構築が話題となっているが、都市における巡覧の歴史的な考察は未だ不十分である。人間の尺度の空間は、都市の遊歩空間としてのパサージュに注目したW・ベンヤミンや、B・ルドフスキー『人間のための街路』(平良敬一他訳、鹿島出版会, 1996)で再認識された。都市空間に自動車が氾濫する以前の徒歩による空間を歴史的に振り返って捉え直した論考には、幕末の日記を用いて散策の型を考察した高口恭行『散策空間の研究』(京都大学学位論文, 1973)や、街路や社寺境内の活用に注目した鳴海邦碩『都市における自由空間の研究』(京都大学学位論文, 1978)がある。しかし近世の巡覧に深く関わる名所記を用いて巡覧都市の記述の史的展開を再構築した試みは少ない。
- 7) 本文中の名所案内記は、特に断らない限り、新修京都叢書刊行会編『新修京

都叢書』1-22(臨川書店, 1993-1995)に基づく。

- 8) 拙稿「江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間-類型化と編纂史の分析を通して-」(『地域と環境』2, 1999, 29-39頁)。この中で名所案内記の分類を試み、編纂の流れを通して名所巡覧のあり方を探った。
- 9) ①は主に町地の案内であるから条件(b)を満たさない。③は石・山といった項目別の案内であるから条件(a)を満たさないで除外した。
- 10) 『国書総目録』(国文学研究資料館編, 岩波書店, 1989-1991)で「地誌」に分類されている史料と、他分類の史料で管見の限り、近世京都地誌の全体数は193である。そのうち第一期は64、第二期は65、年代不明は64である。第一期のうち名所案内記は40あり、①は9、②は25、③は6である。
- 11) 名所とはそもそも歌に詠まれるナドコロであり、歌を伴って記されることが多い。平安京以来の京の名所については、高橋康夫「都市と名所の形成〔京都を素材として〕」(『季刊自然と文化』27, 1990, 4-11頁)参照。江戸期の京都の名所は、江戸や大坂に比べて社寺の占める割合が高く、名所のほとんどが社寺であるとされる(渡辺勝彦・内藤昌「名所の形体要素-江戸時代4都における都市景観の研究1-」『日本都市計画学会学術研究論文集』20, 1985, 13-18頁)。京都には花見の名所や祭礼などが豊富にあるが、季節の名所については紙幅の都合によりここでは触れない。
- 12) 意識的にモデルコースを紹介する場合(表1の史料7, 10, 12, 13)と、名所の配列順序や文面に自ずと順路が現われている場合(史料1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 11)とがある。本稿は両者を対象とする。
- 13) <洛中の巡覧>と<洛外の巡覧>を判別できないものは、地域が限定される『嵯峨名所盡』(1661)と、霊場順拝案内である『京都名所旧跡霊仏霊社順巡覧』(1689)、『円光大師京都廿五ヶ所巡拝記』(明和頃)であり、これらを除く。
- 14) 書誌情報の詳細は前掲注7)8)を参照されたい。編者の出身地は、史料2, 6, 9は京都出身、1, 3, 5, 8は幼少期より京都在、4, 12, 13は他国出身である。初版版元は京都が多く、史料5は江戸である。版元の所在と順路形式の対応は認められない。記述方式は、史料1, 2, 3, 4は仮名草子的な物語性を伴う読み物、5, 6は漢詩や和歌に重きをおくもの、8, 9は網羅的な記録性の強い地誌、7, 10, 12, 13は巡覧の便を目的とする。目的別による順路形式の違いも認められない。構成はほぼ共通し、各名所の所在地、縁起、行事等をしばしば和歌を伴って記す。史料2, 8, 9には地図がある。1, 2, 3, 4, 7, 10, 11, 12には挿絵がある。史料の相互関係は、3は1と『京童跡追』(1667)を再構成したものであり、2は4の、10は11の粉本である。
- 15) 名所記には「これより洛中洛外神社佛閣見物の順路をしるす」(史料7)、「洛中洛外の神社佛閣名所舊跡の順道を書わけて不案内なる旅人の便とす」(史料10)といった表現があり、「洛中」と「洛外」の案内が対として捉えられている。
- 16) この範囲を超えて、北は大悲山、東は坂本・石山、南は笠置、西は高槻村を含む事例(例えば史料4)もある。
- 17) 貝原益軒著。初版は宝永3年(1706)序、享保3年(1718)板行。本稿は、茨城多左衛門開板による京都大学文学部所蔵本を用いた。これは享保6年(1721)の年記を有するが、初版の板本を用いたとされる。天明4年(1784)に再刻本、文化12年(1815)に求板本が出ている。
- 18) 山崎正史は前掲「歴史都市の意匠とその保全計画手法に関する基礎的考察」の中で17日間の行程を表にまとめ、そのうちの9行程を明示している。本稿では、坂本と石山の一部を除くほぼすべての行程と、その起点を示す。
- 19) 史料7と10は、洛中の三条通、下立売通、寺町通、室町通、大宮通を通って洛外へ向かうように設定されており、これらの通りが洛外への幹線道路とされていることが分かる。
- 20) 南西に位置する乙訓郡の案内から始める史料9は例外である。
- 21) 史料1, 7, 10, 12は、本文中に道筋を示す言葉があり、それに従って正確な巡覧コースを図示できる史料である。また<洛中の巡覧>にみられる順路型の4種(本節末尾参照)を示す好例である。
- 22) 表2には、順路を図示した史料1, 7, 10, 12に登場する洛中名所に加えて、史料5の名所配列も示し、第4節で述べる洛中洛外区分の4種の事例を示した。
- 23) 中川喜雲著。初版は明暦4年(1658)、山森六兵衛板行。本稿は前掲『新修京都叢書1』による。同じ年記をもつ八文字屋再版本と平野屋求板本がある。
- 24) 順路の正確さを期すため、本文から得られた順路に関わる表現に基づいて図示した。
- 25) 著者不明。初版は宝永5年(1708)、辻勘重郎板行。本稿は前掲『新修京都叢書5』による。宝暦5年(1755)に守拙斎の序を冠した再板本がある。
- 26) 『京内まゐり』は、「此小冊専順道をもとゝして」(凡例)とあるように順路を詳しく説明する点に特徴があり、説明方法にも特色がある。道筋にいくつか選択肢があるときには棒線(「系」)を引いて分けて示し、「用捨は見る人の心にまかすべし」とする。表2で括弧内に示した名所は、道筋の選択によっては省略される名所である。また所々に「右にゆけば」「左の方に」として、見る人

- の視点から方角を示す。図3はこれらの説明に基づいて図示した順路である。
- 27) 起点について、「道のりは三條の大橋よりの行程也」(凡例)とあり、本文中にも「京にあそぶ人その旅宿の所によりて順路あしく三條四條邊に宿をさだむべし いまこゝにするすも三條四條の間より往来する順道也」とある。終点について、1日目は「建仁寺町通と云筋の辻迄出てこゝにて其宿々の所を尋て帰るべし」、2日目は「だいぶつよりやどへかへるべし」、3日目は「此所にて宿の所を尋て帰るべし」とある。予め泊るべき旅宿の場所を「三條四條邊」に想定した順路設定であるといえる。
- 28) 著者不明。初版は正徳4年(1714)、上村四郎兵衛板行。本稿は前掲『新修京都叢書5』による。享保15年(1730)に再版本、文政11年(1828)に池田東籬・享校訂による改刻本、文政13年(1830)に改刻再版本がある。
- 29) 個々の名所の解説文の末尾に、次の名所までの道筋を記す。図4は、その記述を手がかりにしてたどった順路である。なお享保15年(1730)の刊記をもつ再版藤屋版では、順路の一部が改変された。初版では「百萬遍→銀閣寺→鹿谷萬無寺→眞如堂→新黒谷→聖護院御門跡→永観堂→南禅寺」であったところを、再版では「百萬遍→吉田社→聖護院御門跡→新黒谷→眞如堂→鹿谷萬無寺→永観堂→銀閣寺→南禅寺」と改変し、順路の乱れが生じている。
- 30) 『都名所車』の順路が伏見の御香宮までを含め、南へ著しく延長することになった成立事情は、洛中洛外図屏風や当時刊行されていた京都図との関係から類推できる。まず名所配列の点からみると、『都名所車』にみられる上賀茂から伏見に至る名所のつなぎ方は、洛中洛外図に描かれた東山の名所配置(例えば林原美術館本)と共通している。南端を伏見の御香宮とする点は、17世紀後半以降のほとんどの京都図の構図に等しい(例えば林吉永刊「新撰増補京大絵図」(1686))。さらに名所間の距離をみると、洛中洛外図や京都図は大仏殿以南を縮めて描き、距離的には遠いはずの大仏殿と伏見が近接して見える構図となっている。『都名所車』の編者がこのような当時の図像に共通するパラダイムに影響を受けたとすると、現実には洛外の遠いところにある御香宮までを洛中のコースに取り込んだ事情を理解できる。『京童』が洛中洛外図の粉本となった事例があり、名所記と洛中洛外図の影響関係に示唆を与える指摘もある(岩崎均史「国立歴史民俗博物館蔵 洛中洛外図屏風の考察-先行版本挿絵との関係-」『鹿島美術研究』13別冊, 1996, 141-157頁)。以上のことから、『都名所車』の順路は洛中洛外図屏風や京都図の上で名所をたどる方法によって考案された可能性が考えられる。
- 31) 前掲注17)。
- 32) 『京童』(京都大学附属図書館本)の寸法は縦26.6×横17.4cmで、全6巻ある。
- 33) 『京童』と同じ中川喜雲による『鎌倉物語』(1659)には「踵をめぐらずして彼地をまのまへにながめ」(序)という表現がある。仮名草子系列の名所記について、大本を「居ながら名所を知らしむ」娯楽の書、小本を実用の書と位置づける指摘がある(岸得蔵「仮名草子における名所記遊覧記」市古貞次ほか編『日本古典鑑賞講座 御伽草子・仮名草子16』角川書店, 1963, 289-300頁)。
- 34) 史料7, 10, 12は、山近博義「近世名所案内記類の特性に関する覚書-「京都もの」を中心に-」(『地理学報』34, 1999, 96-106頁)で「小型案内記」に分類されている。
- 35) 例えば司馬江漢は、天明9年(1789)3月21日に嵯峨野めぐりをした折、『京城勝覧』(京都大学文学部図書館本)の寸法は縦17.9×横12.1cmである。
- 36) 前掲注26)。
- 37) 前掲注27)。
- 38) 『京内まゐり』(京都大学附属図書館本)の寸法は縦12.8×横18.5cmで、携行可能な大きさである。
- 39) 前掲注29)。
- 40) 『都名所車』(京都大学附属図書館本)の寸法は縦15.9×横10.8cmである。
- 41) 前掲注30)。
- 42) 『京城勝覧』(京都大学文学部図書館本)の寸法は縦17.9×横12.1cmである。
- 43) 一条-三条間の市街地は、取り上げられる名所が少なく、巡覧コースが積極的に通ることは稀である。
- 44) 前掲『京都の歴史5』の別添地図をもとに作成した。
- 45) 近世の鴨東、河原の開発と都市域の拡大については、日向進「近世京都における新地開発と「地面支配人」-鴨東、河原の開発をめぐる-」(『日本建築学会計画系論文集』407, 1990, 129-137頁)、小出祐子「近世京都における新地開発について-18世紀建仁寺門前地区を事例として-」(『日本建築学会計画系論文集』532, 2000, 209-214頁)、岡佳子ほか「近世京都・鴨東地区の新地開発に関する研究-高台寺門前の宅地開発と住まい-」(『大阪市立大学生活科学部紀要』43, 1995, 155-164頁)、土本俊和「近世京都の拡大過程に関する編年」(『建築史学』25, 1995, 130-156頁)等で詳しく論究されている。
- 46) 寺町通沿いには小川が流れ、参拝者はそこにかかる橋を渡って寺の境内に入る。その様子は『都名所図会』(1780)の挿絵によく描かれている。洛中の他の場所においても小川に沿って歩いたり小川を渡るなど水辺を巡覧する場面が多かったことは、『京城勝覧』(天明版)の挿画から推察できる。
- 47) 高木博志「近世の内裏空間・近代の京都御苑」『コスモロジーの「近世」』岩波書店, 2001, 285-295頁。
- 48) 名所記の本文中にも「凡人常の時御門に入らず 時により御免しありて拜覧する日あり」(『京内まゐり』「禁中」の項)と紹介されている。
- 49) 史料11は<洛外の巡覧>の起点に「上賀茂」と「下鴨」を設定している。
- 50) <洛外の巡覧>では史料7, 10, 12などが七口タイプといえる。史料13では二条口から三条口へ、四条口から丹波口へというように終点にもなっている。
- 51) 前掲注27)。
- 52) 三条近辺は、東山巡りの起点となるほか、西部の愛宕山や高雄、北部の岩屋、鞍馬、大原、東部の石山や山科への起点となる。五条橋は、東山巡りのほか、伏見方面への起点となる。四条河原は東山巡りの終点となる場合もある。
- 53) 三条大橋は東海道の西の起着点であり、江戸方面からの旅人にとって京都の玄関口にあたる。五条橋は、山科へ通じる渋谷越や、伏見・大和方面への街道の起点であった。
- 54) 『都名所車』では「三條大橋より諸方道程大概」、『京城勝覧』(天明版)では「洛中洛外三條大橋より行程」と題する距離一覧を載せる。
- 55) 元禄13年(1700)から同16年にかけて調査、編集された『元禄覚書』によると、三条大橋や五条橋の橋詰めなど、鴨川沿いに立地する旅籠屋数は134件を数え、全体の約60%にあたる。
- 56) 近世の鴨川沿いには先斗町、宮川町、七条新地などがあり、祇園から清水にかけては祇園町、下河原、辰巳新地などの遊所が集中していた。四条河原には芝居街があり、一大遊興地として発展していた(足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社, 1994, 93頁)。
- 57) 名所の中には「景よし」「佳景なり」という言葉で讃えられる名所がある。それらを検証すると、①山の風景と水の風景とを同時に愛でる名所(嵐山や広沢池など)と、②遠くまで見渡す眺望の名所(比叡山や、東山の靈山正法寺など)がこれに該当する。他方、③町並みについての記述は稀であり、史料12に「凡京中にて中立売、室町、新在家など尤奇麗なる町なり」という一文があるばかりである。鴨川沿いは上記①②を満たす場所であり、中でも橋上からの眺めが良いとされた。三条大橋からは比叡山や鞍馬などを眺められるとされ(史料12)、五条橋については「この橋上の半より東に向へば、洛東の勝地、木の間木の間に踞れて、平安の佳境ここにとどまる」(『都名所図会』)とある。この表現からも、三条大橋や五条橋には京都めぐりの期待感を高める効果があり、起点としての価値を持っていたことが推察できる。
- 58) 御土居東面の河原町近辺で取り壊しが激しかった。『京都覚書』(1691)では鴨川の洪水と河原町の発展によるとされる。延宝4年(1676)の様子を描いた「祇園社并旅所図局類」(『局類軌範』所収)には、当時の御土居が河原町筋の町家の裏に僅かに残る竹藪として描かれ、御土居を越えて東方に町家が建ち並ぶ様子を見て取れる(西川幸治「町の変貌」前掲『京都の歴史5』161-167頁)。
- 59) 鴨東の開発については前掲注45)。市街化の進んだ祇園・八坂界限について、『雍州府志』(1686)には「祇園町八坂郷清水坂(中略)殆足与洛内相比」とある。
- 60) 知恩寺(百万遍)は、寛文2年(1662)に京極土御門から現在地に移転した。真如堂は、元禄6年(1693)に京極今出川から神楽岡東の地に移転した。
- 61) 二条川東は、寛文13年(1673)の頂妙寺移転後、宝永大火(1708)で焼けた禁裏南部の寺院や民家を移して町とした新地である。
- 62) 例えば、三条大橋からA地区の吉田やB地区の清水寺までの距離は、洛中の内裏や二条城までの距離とほぼ同じ(約2km)である。
- 63) 辻ミチ子「近郊の営み」(前掲『京都の歴史5』593-596, 606頁)。
- 64) 霊場順拝は、『京羽二重』(1685)では5種、『都すづめ案内者』(1715)では17種が紹介されている。番号順にたどると、洛中近郊をめぐる順路を描くことができ、例えば「洛陽三十三所観音」はA、B地区から市街南部へ、「四十八願寺」は市街北部からA、B地区へとたどる。A、B地区と市街の名所の連続は、項目別に案内する『雍州府志』(1686)「寺院門」の名所配列にもみられる。
- 65) 『京都河原町丸屋町古記録』(西川幸治「町の変貌」前掲『京都の歴史5』165-166頁)。
- 66) 例えば、鴨川西岸の高瀬新屋敷は町代によって支配され、領域的には洛中の町として位置づけられた(土本俊和「京都高瀬新屋敷の創出-河原への開発と「開発之仁」-」『日本建築学会計画系論文集』463, 1994, 171頁)。
- 67) 前掲「中川喜雲・ある名所記作家の場合」210-217頁。

(2003年5月6日原稿受理、2004年2月16日採用決定)